

マクタガートの A 理論と B 理論の成立経緯と「時間の空間化」

小山 虎

Abstract

McTaggart's paradox and his A-theory and B-theory are basic notions in the contemporary philosophy of time. It is well known that the paradox was introduced by McTaggart's paper called "The Unreality of Time" published in 1908, so that it has a one-hundred-year history. As for A-theory and B-theory, in contrast, McTaggart himself didn't consider both of them at all. The notions of A-theory and B-theory came much later, 60 years after the paradox. Moreover, they had not been as popularized as they are today until quite recently, at least after the 1990s. This paper aims to trace the origin of the notions of A-theory and B-theory and show how the debates behind them, especially objections to "spatialising time," form the notions.

1 はじめに

現代時間論では、いわゆる「マクタガートのパラドックス (McTaggart's Paradox)」が議論の出発点になっていることを見かけることが少なくない (とりわけ分析哲学における時間論ではこのことが当てはまるだろう)。また、マクタガートのパラドックスを解決する二つの主要な説は「時間の A 理論 (A-theory of time)」と「時間の B 理論 (B-theory of time)」と呼ばれ、両者の間の理論対立は、マクタガートの名前とともに現代時間論の主要概念の一つとなっている¹。

マクタガートは哲学者以外にも知名度が比較的高いこともあり、このような取り扱いを受けることは理解できる。ただし、哲学者と非哲学者のマクタガートに対する関心には一つ大きな違いがある。哲学者にとってマクタガートと言えば、マクタガートのパラドックスや A 理論と B 理論であるのに対し、非哲学者の間ではこれらはほとんど知られていないのである。非哲学者がマクタガートの名前から連想するのは、むしろ時間の A 系列 (A-series) と B 系列 (B-series) の区別である。A 系列と B 系列はマクタガートのパラドックスを導出するための前提条件であり、この違いは単に、哲学者と非哲学者の関心の違いに由来するものかもしれない。しかし、もっとシンプルな説明も可能である。というのは、マクタガートのパラドックスが提示されたことで名高い論文「The Unreality of Time」(McTaggart, 1908) では、A 系列と B

系列（および C 系列）の区別は導入されているものの、A 理論と B 理論は登場しないからである。つまり、哲学者は McTaggart (1908) がどのような議論を巻き起こしたのかも知っている（また、専門家として知っていなければならない）がゆえに、マクタガートのパラドックスや A 理論と B 理論こそが重要だと考える。一方、McTaggart (1908) しか知らない非専門家は、そこで提示される論証に目を通していても、それが「マクタガートのパラドックス」と呼ばれていることや、パラドックスを解決する主要な説として「A 理論」と呼ばれる説と「B 理論」と呼ばれる説があるということは、知る由もない。だが、A 系列と B 系列の区別は、その名称も含めて、McTaggart (1908) で明記されている。だから、McTaggart (1908) しか知らない非専門家には、A 系列と B 系列の区別の方が印象に残るのである。

McTaggart (1908) には A 系列と B 系列は登場しても、A 理論と B 理論は登場しない。このことは McTaggart (1908) を読んだことのある哲学者の間ではよく知られた事実であろう。また、そもそも A 理論と B 理論は、マクタガートの他の文献でも一切登場していないということも比較的知られていると思われる。つまり、意識されることはあまりないかもしれないが、マクタガート本人は A 理論と B 理論について全く論じていない（そもそも McTaggart (1908) のタイトルから容易に想像できるように、A 理論も B 理論もマクタガート本人が支持する立場ではなく、よって論じる必要もない）。しかし、A 理論と B 理論および両者の間の理論対立はいつ登場するのかはあまり知られていない。「A 理論」と「B 理論」という用語法が登場し、両者が対立していることが初めて論じられるのは、McTaggart (1908) のおよそ 60 年後のことである。すなわち、マクタガートのパラドックスそのものには 100 年以上の歴史があるとしても、A 理論と B 理論は、まだ 50 年しか経っていない比較的新しい概念なのである。

A 理論と B 理論の成立からまだ **50 年しか**経っていない（すなわち、ゲティア問題とほぼ同時期（むしろ少し新しい））という事実は、特になんら疑念を抱かせるものではないかもしれない。たとえ 50 年強の歴史しかないとしても、現時点において A 理論と B 理論が現代時間論の主要概念であるという**事実**は揺るがないだろう。しかし、A 理論と B 理論が哲学者の間で知られるようになったのが、さらに 30 年後、McTaggart (1908) のおよそ 90 年後である（すなわち、ゾンビ論法とほぼ同時期（むしろ少し新しい））という点についてはどうだろうか。（時に「マクタガートの」という修飾語が付くにもかかわらず）A 理論と B 理論の歴史がまだ 20 年強しかないということは、A 理論と B 理論の位置付けについて少しは疑念を抱かせるものではないだろうか。

マクタガートのパラドックスについては、現在では網羅的に調べ上げられており、マクタガート本人についても詳しい研究がある (Ingthorsson, 2016; McDaniel, 2020). しかし、A 理論と B 理論の対立という構図はどのようにして登場したのか、また、それ以前にはどのような議論があり、どのようにしてこの構図が成立するに至ったのか、という疑問について、包括的な答えを与える研究は、管見では存在しない。本稿は、A 理論と B 理論の対立が成立した経緯について一つのストーリーを提示するものである。

本稿の構成は以下のとおりである。続く第 2 節では、マクタガートのパラドックスに関する歴史的事実をいくつか提示する。一つは、マクタガートのパラドックスには異なるバージョンが存在するという点であり、もう一つは、McTaggart (1908) は出版から 1950 年代までの 50 年間、現代のような注目はなされてこなかったという点である。第 3 節では、A 理論と B 理論の対立という構図は、いつ、どのように成立したのかを述べる。「A 理論」と「B 理論」という用語法が初めて用いられたのは 1960 年代のことであり、その背景には時制の還元についての論争と、時間の空間化についての論争があった。マクタガートのパラドックスは、この二つの論争を結びつけるものである。しかし、A 理論と B 理論という用語法はすぐに広まったわけではなかった。最後の第 4 節では、A 理論と B 理論という用語法がいつ広まったのかについて、若干の考察を与える。

2 マクタガートのパラドックスの受容

まずは準備として、マクタガートのパラドックスに関する歴史的事実をいくつか提示しておきたい²。あまり知られていないが、マクタガートのパラドックスは、少しずつ異なった形で三度出版されている³。最初のものは前述の論文 McTaggart (1908) である。これは *Mind* 誌に掲載されたものであり、後に修正を加えられて、主著 *The Nature of Existence* の第二巻の一部となる (McTaggart, 1927, Ch. XXXIII)。マクタガートは McTaggart (1927) 出版の前に死去するが、主要論文をまとめた論文集 *Philosophical Studies* が出版される際、McTaggart (1908) も収録される (McTaggart, 1934, Ch. V)⁴。

McTaggart (1927) での議論は、基本的に McTaggart (1908) の増補改訂版である。削除された論点や Russell (1903) への反論と Broad (1923) への反論が追加されているなど変更点がかなりあり、こちらが最終版とみなされることが多い。また、McTaggart (1908) では最後に少し論じられただけの C 系列に関する議論が大幅に拡張されている (McTaggart, 1927, Ch. 45–49 およ

び Ch. 60). また、新たに D 系列が導入されている (McTaggart, 1927, Ch. 48). McTaggart (1934) 収録版は、McTaggart (1927) との違いが編者による注の形で記載されているだけで、内容的には McTaggart (1908) と同じものである⁵.

マクタガートのパラドックスは、McTaggart (1908) 出版当初から大きく注目されていたとは言い難い。もちろん当時のマクタガートはイギリス・ケンブリッジ大学を代表する哲学者であり、McTaggart (1908) も広く読まれたと想像される (たとえば、翌年の *Philosophical Review* 誌の論文紹介 (Summaries of Articles) でさっそく取り上げられている (Weaver, 1909))。しかし、McTaggart (1908) 出版からしばらくの間、現代見られるようなマクタガートのパラドックスの解決策を論じた文献はほとんど見当たらない。おそらくその理由は、イギリス観念論から分析哲学への移行の始まりの一つとされる G. E. ムーアの「*The Refutation of Idealism*」(Moore, 1903) の出版より後とはいえ、当時はまだ観念論が主流であり、観念論者にとって時間の非実在性は特に目新しいテーマではなかったということがあると思われる⁶。また、比較的初期に McTaggart (1908) について論じた 2 本の論文は、いずれも McTaggart (1908) およびマクタガートのパラドックスを高く評価していない (Reyburn, 1913; Welby, 1909)。このように、現在とは異なり、McTaggart (1908) は彼の主要な著作とみなされていないことがうかがえる。

McTaggart (1927) はマクタガートの主著であり、出版前の草稿を死後に出版したものだったという事情にも助けられ、広く読まれたようである。にもかかわらず、McTaggart (1927) について論じた当時の文献のほとんどが観念論者マクタガートの形而上学的体系について論評したものである。マクタガートのパラドックス、とりわけ A 系列と B 系列の区別にきちんと言及してそれを論じている文献は、Gotshalk (1930) が唯一だと言っても過言ではない。

前述のように、マクタガートはイギリス・ケンブリッジ大学を代表する哲学者であったが、それは分析哲学以前のことであり、通常であれば、その名声は死後早い段階で過去のものとなっていたであろう。そうならなかったのは、*The Nature of Existence* の注釈書である C. D. ブロードの *Examination of McTaggart's Philosophy* (Broad, 1933, 1938) が出版されたことが大きな要因であろう。

ブロードの名前は現在でこそそれほど知られていないが、当時はワイトゲンシュタインと共にケンブリッジ大学の哲学教授を務めており、ケンブリッジ大学の代表的な哲学者だった。ブロードはマクタガートの教え子であり、マクタガートの後任としてケンブリッジ大学に着任後、残された遺稿に基づい

て McTaggart (1927) を編集を担当している。McTaggart (1927) について論じた Broad (1938) は、マクタガートのパラドックスをあまり評価していないものの、マクタガートが読まれる最も大きなきっかけになっていたことは否定できないと思われる。ただし、Broad (1938) の議論は高く評価されていない (Geach, 1979; Ingthorsson, 2016)。むしろ、ブロードはその影響力のせいで、マクタガートのパラドックスに対する誤解を広めた可能性があることには注意する必要があるだろう。

このようにマクタガートのパラドックスは、ある程度読まれてはきたものの、現在のような高い評価を得てきたわけではなかった。この状況は 1960 年代に大きく変化する。先鞭をつけるのは、1960 年に出版された M. ダメットの論文「A Defense of McTaggart's Proof of the Unreality of Time」である (Dummett, 1960)。Dummett (1960) の出版背景や具体的な影響は明らかでないが、以降、現代でも見られるようなマクタガートのパラドックスに関する議論が続いていくことになる。A 理論と B 理論の登場も、これを背景にしたものである。

3 A 理論と B 理論の成立とその背景

A 理論と B 理論は、マクタガートのパラドックスを解決する二つの主要な説である。極めて大雑把に説明すると、マクタガートのパラドックスは、A 系列と B 系列という二つの時間系列が導入された上で、時間が実在しないという受け入れ難い結論が導かれる（このため、「パラドックス」と呼ばれる）。A 理論と B 理論はそれぞれ、A 系列または B 系列が時間にとって根本的だとすることで、時間が実在しないという結論が導き出されるのを回避するというものである⁷。このように、A 理論と B 理論はそれぞれ A 系列と B 系列に密接に結びついているため、そのような名称で呼ぶことは自然であり、何か特段の理由が必要となるようなものには見えない。そのためか、A 理論と B 理論が誰に由来するかは明示されることは滅多にない（たとえば、*Stanford Encyclopedia of Philosophy* と *Internet Encyclopedia of Philosophy* の項目では特に何も述べられていない）。数少ない例外の一つが N. オークランダーである。オークランダーは、A 理論と B 理論という用語法が最初に採用されたのは、R. ゲイルが編集した *The Philosophy of Time* というアンソロジー (Gale, 1967) だと述べている (Oaklander, 2015, p. 256)。しかし、実はゲイルはその一年前の論文 (Gale, 1966) で既に同じ用語法を用いている (Farr, 2020, p. 2, n. 2)。いずれにせよ、こうした記述を見る限り、この用語法はゲイルに

よって 1960 年代に考案されたものだと考えて差し支えないだろう。

Gale (1966) は「McTaggart's Analysis of Time」というそのタイトルからしても、A 理論と B 理論という用語法の初出であると考えて概ね問題ないと思われる。しかし、Gale (1966) はゲイルが初めて書いた時間論の論文ではない。とりわけ、Gale (1966) の四年前にゲイルは「Tensed Statements」(Gale, 1962) という論文を書いている。この論文は、マクタガートへの言及こそされていないものの、「A 規定 (A-determination)」および「B 関係 (B-relation)」という McTaggart (1908) と同じ用語が用いられており、A 規定が B 関係に還元可能かどうかという、マクタガートのパラドックスに親しんでいるものにとっては馴染み深いテーマが論じられている。それだけではない。Gale (1962) では、A 規定が B 関係に還元可能であるという立場が「ラッセル理論 (the Russellian theory)」, A 規定は B 関係に還元不可能であるという立場が「ブロード理論 (the Broadian theory)」と呼ばれている (それぞれ、B. ラッセルおよび C. D. ブロードに由来する。cf. Gale (1962), p. 53)。一般的には還元可能であるならば根本的ではないと考えられるため、ラッセル論者は B 論者に、ブロード論者は A 論者に分類される。このように、ラッセル理論とブロード理論の対立は、A 理論と B 理論の対立と同じものではないものの、その原型とみなしうるものである。

初期の B 理論が時制の還元主義と同一視されることがあるのを考えれば、ブロード理論を A 理論に、ラッセル理論を B 理論に重ね合わせて考えるのは、それほど不思議なことでない。要するに、「A 理論」と「B 理論」という用語法の初出は Gale (1966) かもしれないが、原型となる理論対立はそれ以前から存在していたと考えられるのである。

3.1 「時制の還元可能性」論争

Gale (1962) でのラッセル理論とブロード理論の対立は何に由来するものなのだろうか。Gale (1962) では、議論の背景となる文献がほとんど挙げられていない。しかし、ラッセル理論の支持者として、R. G. ブレイスウェイト、A. J. エアー、W. V. O. クワイン、N. グッドマン、ブロード理論の支持者として、J. ウィズダム、D. F. ペアーズ、P. F. ストローソン、A. N. プライアー、W. セラーズの名前が挙げられている (p. 53, n. 3 および n. 4)。これは、Gale (1962) がどのような文脈にあるかを部分的に示唆している。ラッセル理論とブロード理論の対立は時制の還元可能性についての対立であるが、時制の還元については、Reichenbach (1947) でトークン反射的表現 (token

reflexives) の概念が導入され、時制付き言語を時制なし言語へと翻訳する方法が示されたことをきっかけに論争が生じている。Reichenbach (1947) の手法を批判して時制の還元可能性を否定する論者の代表としてはストローソンとプライアー、彼らに反し、時制の還元を支持する論者の代表としてクワインと J. J. C. スマートが挙げられる (Prior, 1959; Quine, 1953; Smart, 1955; Strawson, 1952)⁸。以下では、この論争を「時制の還元可能性」と呼ぶ。上述のように Gale (1962) ではストローソンとプライアーはブロード理論の支持者、クワインはラッセル理論の支持者として挙げられており、時制の還元可能性との対立構図の一致が見られる。

厳密には Gale (1962) と時制の還元可能性の対立構図には違いがある。例えば、Smart (1955) は Gale (1962) では両立論者として参照されており、そもそも Reichenbach (1947) が参照されていない (p. 53, n. 1)。しかし、「A 理論」と「B 理論」の用語法が導入された Gale (1966) では、スマートは B 論者に分類されている (p. 146, n. 2)。すなわち、Gale (1962) よりも A 理論と B 理論という用語法が採用された Gale (1966) での対立構図の方が時制の還元可能性の対立構図に近い。

この対立構図の変化は、ゲイルが意識的に行なったものだと考えられる。そのことを示唆するのが、スマートによる Gale (1962) へのコメントと、それに対するゲイルの応答である (Smart, 1962; Gale, 1963)。前者は「Tensed Statements: A Comment」という 2 ページだけの短い論文であり、とりわけ Reichenbach (1947) を参照しつつ、トークン反射的表現の取り扱いが不適切だという指摘がなされている (p. 264)。このスマートによる指摘にゲイルは受け入れており (Gale, 1963, p. 354)、翌年には、スマートの指摘を踏まえたトークン反射的表現についての論文を書いている (Gale, 1964)。

3.2 マクタガートのパラドックスと「時間の空間化」

Gale (1966) が A 理論と B 理論という用語法が初めて導入された文献だとしても、Gale (1966) がこの用語法を広めたとは考えにくい。むしろ、Oaklander (2015) が挙げていた Gale (1967) の方が重要だと思われる。Gale (1967) は教科書として使われることが念頭に置かれたアンソロジーであり、特に、「The Static Versus The Dynamic Temporal」と題された第 2 セクションがマクタガートのパラドックスから始まっているという点でも、現代におけるマクタガートのパラドックスの位置付けに沿ったものになっているからである⁹。Gale (1967) の方であれば、それを通じて、マクタガートのパラドックスを出発点

とする時間論の理解，および A 理論と B 理論という用語法が広まっても全くおかしくはない。

しかし，どうして Gale (1967) ではマクタガートのパラドックスが出発点として位置付けられているのだろうか．正直なところ，この疑問に十分な根拠を持って答えることはできない．しかし，示唆的な証拠を挙げることはできる．Gale (1967) と同年に出版されたプライアーの *Past, Present, and Future* (Prior, 1967) の第 1 章は「Precursors of Tense-Logic」と題されており，マクタガートのパラドックスを出発点としているなど，Gale (1967) の第 2 セクションと共通点が多い¹⁰．そして，Prior (1967) は Prior (1957) の続編であるにもかかわらず，Prior (1957) にはマクタガートについての言及が一切ない．ということは，プライアーは 1958 年から 1967 年までの 10 年間の間にマクタガートのパラドックスを出発点にするというアイデアを得たことになる．事実 Prior (1967) には，P. T. ギーチからマクタガートの重要性を教えてもらったという旨の記載がある (Prior, 1967, Preface)．つまり，Prior (1967) の第 1 章の構成はギーチに由来すると考えられるのである．

ギーチがマクタガートを高く評価していたことは疑いない．ギーチはマクタガートについての書籍 (Geach, 1979) を執筆するなど，マクタガートの専門家だった¹¹．そしてギーチによれば，マクタガートのパラドックスは時制の還元に対抗する議論を含んでいるのである．

マクタガートのパラドックスが時制の還元に対抗する議論を含んでいるとギーチが考えたのは，時制の還元可能性が時間の空間化（あるいは四次元主義¹²）と結びついているからである．Gale (1962) と Gale (1966) でスマートの位置付けが異なっていることは前述の通りである．その違いは，Smart (1955) をどのように理解するかに存する．Smart (1955) は「Spatializing Time」と題された短い論文であり，スマートが自身の以前の論文 (Smart, 1949) で支持した「時間の空間化 (spatializing time)」に対する批判 (Mundle, 1954) に応答したものである．Prior (1959) はその応答を批判しているのだが，その際にスマートだけでなくクワインも「四次元ワーム (four-dimensional worm)」説だとして批判している (p. 12)．このようにスマートとクワインを四次元主義者として批判するのはプライアーだけではない．ギーチも全く同様にクワインの「四次元ワーム」説を批判している (Geach, 1966, pp. 322-323)¹³．すなわち，プライアーとギーチからすれば，クワインとスマートは時制の還元を支持するだけでなく，時間の空間化（あるいは四次元主義）を支持しているという点で批判されるのである．

そしてギーチはプライアーとは異なり，時間の空間化批判としてマクタガー

トのパラドックスを利用している (Geach, 1966, p. 322). ギーチによれば, マクタガートのパラドックスの前提の一つは, 「A 系列 (あるいは A 規定) なしの変化は不可能である」というものである. そして, ある対象が変化することとは, その対象についての命題が時点が異なるだけで真偽も異なることだと定式化することができる (Geach はこの定式化に基づく変化を, マクタガートやラッセル, ブロードら当時のケンブリッジの哲学者の間で共有されていた変化の理解だとして「ケンブリッジ変化 (Cambridge Change)」と名づけている (Geach, 1979, pp. 90-91)). しかし, 時間の空間化 (あるいは四次元主義) では, 別の時点に位置する部分 (すなわち時間的部分) が別の性質を持つだけで上記の変化の条件を満たすことができる. つまり, ギーチは, マクタガートのパラドックスの問題の前提は, 時制の還元と衝突すると思ったのである.

現代の哲学者であれば, これは単にクワインやスマートは B 論者であり, よってマクタガートのパラドックスの問題の前提を受け入れていない, という事に過ぎないと思われるだろう. それはつまり, プライアーやブロードなどの A 論者 (およびマクタガート本人) は問題の前提を受け入れるという点で B 論者と意見を異にする, ということである. このようにギーチは, 時制の還元可能性が時間の空間化と結びついていることに注目し, マクタガートを時間の空間化と時制の還元に対抗する議論を提示した哲学者として位置付けたのである.

本節で述べてきたことをまとめると以下のようなになる. ギーチはそれ以前の哲学者とは異なり, マクタガートを時制の還元および時間の空間化に対抗する哲学者として位置付けた. プライアーはギーチからマクタガートについて学んだため, Prior (1967) では, マクタガートのパラドックスを時制が還元可能性の出発点 (そして時制論理の先駆者) として位置付けられている. Gale (1967) も Prior (1967) と同様に, マクタガートのパラドックスを時制の還元可能性の出発点として位置付けている. Gale (1967) の構成が Prior (1967) やギーチを参考にしたものかどうかは明らかではないが¹⁴, Gale (1967) も時制の還元可能性を踏まえた構成になっているため, 単なる偶然の一致という可能性は低いと考えられる.

4 おわりに : A 理論と B 理論の普及

前節で見てきたように, Gale (1967) はマクタガートのパラドックスを一つの出発点としており, しかも A 理論と B 理論という用語法が採用されている

最初の文献だと考えられる。しかし、実のところ、Gale (1967) によって A 理論と B 理論という用語法が広まったとも考えにくい。Gale (1967) 出版以降も 1990 年代後半に至るまで、A 理論と B 理論という用語法を採用した文献はほとんど見当たらないからである。

では、A 理論と B 理論という用語法はどのようにして広まったのだろうか。大きな転機は D. H. メラーの *Real Time II* (Mellor, 1998) である。おそらく Mellor (1998) は、A 理論と B 理論という用語法を採用しており、かつ広く読まれた最初の文献である。その傍証として、メラーがそれ以前に書いた *Real Time* (Mellor, 1981) と比較しよう。もともと Mellor (1998) は、Mellor (1981) の改訂版の予定だったが、大幅に書き直された結果、改訂版ではなく独立した本になった。それだけの大幅な改定が必要になったのは、オークランダーが編者の一人であるアンソロジー *The New Theory of Time* (Oaklander and Smith, 1994) に収録された一連の論文への対応するためである (Mellor, 1998, Preface)。

Mellor (1981) ではマクタガートは論じられているが、A 理論と B 理論という用語法は採用されていない。それに対し、17年後の Mellor (1998) では、A 理論と B 理論という用語法が全面的に採用されている。しかし、Oaklander and Smith (1994) 収録論文には、A 理論と B 理論という用語法を採用したものは 2 本しかない（それ以外は、時制理論 (tensed theory) と無時制理論 (tenseless theory) という用語法が採用されている)。うち 1 本はオークランダーの手によるものである (Oaklander, 1992)。

オークランダーは大学院生だった 1969 年に Gale (1967) を読んでおり、当時としては稀なことに、A 理論と B 理論という用語法を早い段階で身につけていたと考えられる (Oaklander, 2007, p. 289)。したがって、メラーがオークランダーを通じて、A 理論と B 理論という用語法に馴染んでいったのは間違いないと思われる。

本稿では、現代時間論の主要概念の一つである「マクタガートの A 理論と B 理論」について、その成立と普及の経緯について論じた。このような経緯を示すことは、A 理論と B 理論が主要概念であるということについては何も影響を与えないかもしれない。しかし、A 理論と B 理論の取り扱いに注意が必要であることは示せたと思う。特に、A 理論と B 理論について論じる際、現在は入手しやすい McTaggart (1908) に頼りがちだが、それは適切とは言えない。なぜなら、A 理論と B 理論の成立に関わった主な文献（たとえば、Gale (1966), Gale (1967), Prior (1967), Geach (1966)）はどれも、McTaggart

(1908)ではなく、McTaggart (1927)を参照しているからである。第2節で述べたように、McTaggart (1908)とMcTaggart (1927)は内容上の違いも少なくなく、McTaggart (1908)での議論はあくまでプロトタイプだと考えられる。マクタガートのパラドックスそのものの提示にとってはMcTaggart (1908)だけで十分かもしれないが、たとえばA系列とB系列のどちらが根本的なかという問題に取り組むのであれば、McTaggart (1927)を参照すべきだろう(C系列やD系列まで考察に含めるのであればなおさらである)。

このことは、とりわけ過去の哲学者をA論者やB論者に分類する際に顕著である。たとえば、クワインはB論者だとされる¹⁵。しかし、本当にクワインはB論者なのだろうか。B理論がB系列が根本的であるという立場であるならば、クワインにはB系列が根本的だとする理由は特にない。四次元主義者であるクワインにとって重要なのは時空だからだ(よって、C系列の方が根本的だと考えるかもしれない¹⁶)。つまり、McTaggart (1908)に基づいてA理論とB理論を定式化するならば、マクタガートのパラドックスについて論じていないクワインを(少なくともQuine (1953)でもQuine (1960)でも論じられていない)A論者に分類することもB論者に分類することも難しくなってしまう。しかし、本稿で見てきたように、A理論とB理論を、マクタガートのパラドックスではなく、**その成立経緯**に従って時制の還元や時間の空間化によって定式化するならば、クワインは間違いなくB論者である。しかも、この「クワインはB論者か否か」という問題は哲学的には全く重要ではない。B理論をどのように定式化するかに応じて、その答えは自動的に決まると言っても過言ではない、いわば疑似問題だからだ。だが、安易にMcTaggart (1908)に頼ってB理論を定式化してしまうと、容易に答えを出すことはできない問題であるかのように映ってしまう。そうなってしまう原因はクワインの哲学にはない。そもそもMcTaggart (1908)に頼ってB理論を定式化しようとするのが無理筋なのである。

現代は過去の哲学者の文献を入手することが容易な時代である(本稿もその恩恵におおいにあずかっている)。しかし、過去の哲学者にとってはそうではない。当時には当時の文脈があり、その文脈に見合った用語法が採用されているはずである。哲学史研究者にはこのことは明らかかもしれないが、たかだか数十年前でも同じことが当てはまってしまうのである。もしかすると、むしろ20世紀後半の哲学はもう哲学史の研究対象と同じだと考えるべきなのかもしれない。もしA理論とB理論(もはや「マクタガートの」という修飾語をつけるのは適切でないだろう)の成立経緯を辿ることによって得られる教訓があるとすれば、このようなものに違いない。

謝辞

本稿は、日本時間学会第13回大会における個人発表「マクタガートの「時間の非実在性」が哲学的時間論の古典となった経緯について」と日本科学哲学学会第54回大会ワークショップ「現代時間論のこれまでとこれから」における提題に基づいている。当日の聴衆といただいたコメントに感謝したい。

本研究は、JSPS 科研費 19H01187 の助成を受けたものである。

注

¹たとえば、*Stanford Encyclopedia of Philosophy* の「Time」という項目 (Emery, Markosian, and Sullivan, 2020) には、「McTaggart's Argument」と「The A-Theory and the B-Theory」という節があり、*Internet Encyclopedia of Philosophy* の「Time」という項目 (<https://iep.utm.edu/time/>) には、「McTaggart's A-Theory and B-Theory」という節がある。

²本節の内容については、Ingthorsson (2016), Ch. 1 も見よ。

³本稿では扱わないが、マクタガートは、McTaggart (1908) 以前にも時間の非実在性を導く議論を与えている (McDaniel, 2020, sec. 3)。また、同時期に「The Relation of Time and Eternity」という McTaggart (1908) と深く関わっている論文 McTaggart (1909) も書いている。

⁴McTaggart (1934) には、McTaggart (1909) も収録されている。

⁵このように何度も出版されるようになった理由は、マクタガートの執筆スタイルに関係する。マクタガートは既発表の論文を材料にして、改訂を一定数繰り返すというスタイルで書籍を執筆していた。したがって、McTaggart (1908) は McTaggart (1927) の議論のプロトタイプとみなすことができる。McTaggart (1934) に McTaggart (1908) が収録されたのも、マクタガートの執筆スタイルが知られていたために、オリジナルである McTaggart (1908) を入手しやすい形で流通させることが目的だったと思われる。

⁶実際、McTaggart (1908) の冒頭でも、当時の哲学で最も重要な二つの学派（ヘーゲル学派とブラッドリー学派）は時間の実在を否定していると書かれている (p. 31)。

⁷マクタガートのパラドックスの詳細とそれをめぐる議論状況については、Emery, Markosian, and Sullivan (2020) および Ingthorsson (2016) を見よ。

⁸時系列では以下の通りである。Reichenbach (1947) の出版後、Strawson (1952) が Reichenbach (1947) の手法を批判する。それに対して、Quine (1953) が反論する。Smart (1955) も Quine (1953) を支持する。Prior (1959) は Smart (1955) をクワイン路線として批判し、ストローソンを擁護する。

⁹具体的に収録されている論文は、McTaggart (1927) (抜粋)、Williams (1951)、Broad (1938) (抜粋)、Findlay (1941)、Smart (1955) である。

¹⁰具体的には、Gale (1967) に収録されている論文のうち、Williams (1951) 以外はそれをテーマにした節が設けられている（ただし、Smart (1955) ではなく、Smart (1949) が参照されている）。また、Reichenbach (1947) についても同様にそれをテーマにした節が設けられている。

¹¹ギーチがマクタガートの知ったそもそものきっかけは、ギーチの父親がケンブリッジ・トリニティカレッジでマクタガートの教え子だったことだという (Geach, 1979, Preface)。

¹²本稿では、「時間の空間化」と「四次元主義 (four-dimensionalism)」を区別しない。四次元主義については、詳しくは Sider (2001) を見よ。

¹³Geach (1966) が参照しているのは、Quine (1960) と Quine (1953) である (pp. 322–323)。特に後者は Strawson (1952) 批判をした論文である。注 8 を見よ。

¹⁴少なくとも Gale (1967) には Geach (1966) は参考文献として挙がっていない。

¹⁵*Internet Encyclopedia of Philosophy* でも、影響力のある B 論者として、ラッセル、クワイン、メラウ、オー克蘭ダーの 4 名の名前が挙げられている。

¹⁶ 実際、Farr (2020) は自身の特徴づけに基づいて、ライヘンバッハは C 論者の条件を満たしていると言う。もしライヘンバッハが C 論者なのであれば、クワインも C 論者であってもおかしくないだろう。

文献

- Broad, C. D. (1923). *Scientific Thought*. Harcourt, Brace and Company.
- Broad, C. D. (1933). *Examination of McTaggart's Philosophy*, Vol. 1. Cambridge University Press.
- Broad, C. D. (1938). *Examination of McTaggart's Philosophy*, Vol. 2. Cambridge University Press.
- Dummett, Michael (1960). "A Defense of McTaggart's Proof of the Unreality of Time". *Philosophical Review* 69(4), 497–504.
- Emery, Nina, Markosian, Ned, and Sullivan, Meghan (2020). "Time". *The Stanford Encyclopedia of Philosophy (Winter 2020 Edition)*, Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/win2020/entries/time/>>.
- Farr, Matt (2020). "C-theories of Time: On the Adirectionality of Time". *Philosophy Compass* (12), 1–17.
- Findlay, J. N. (1941). "Time: A Treatment of Some Puzzles". *Australasian Journal of Psychology and Philosophy* 19(3), 216–235.
- Gale, Richard M. (1962). "Tensed Statements". *Philosophical Quarterly* 12(46), 53–59.
- Gale, Richard M. (1963). "A Reply to Smart, Mayo and Thalberg on 'Tensed Statements'". *Philosophical Quarterly*, 13(53), 351–356.
- Gale, Richard M. (1964). "The Egocentric Particular and Token-Reflexive Analyses of Tense". *Philosophical Review*, 73(2), 213–228.
- Gale, Richard M. (1966). "McTaggart's Analysis of Time". *American Philosophical Quarterly* 3(2), 145–152.

- Gale, Richard M. (ed.) (1967). *The Philosophy of Time: A Collection of Essays*. Anchor Books.
- Geach, Peter Thomas (1966). “Some Problem about Time”. *Proceedings of the British Academy* 51, 321–336.
- Geach, Peter Thomas (1979). *Truth, Love and Immortality: An Introduction to McTaggart’s Philosophy*. Hutchinson.
- Gotshalk, D. W. (1930). “The Nature of Change”. *Monist* 40(3), 363–380.
- Ingthorsson, Rögnvaldur D. (2016). *McTaggart’s Paradox*. Routledge.
- McDaniel, Kris (2020). “John M. E. McTaggart”. *The Stanford Encyclopedia of Philosophy (Summer 2020 Edition)*, Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/sum2020/entries/mctaggart/>>.
- McTaggart, John McTaggart Ellis (1908). “The Unreality of Time”. *Mind* 17(68), 457–474.
- McTaggart, John McTaggart Ellis (1909). “The Relation of Time and Eternity”. *Mind* 18(71), 343–362.
- McTaggart, John McTaggart Ellis (1927). *The Nature of Existence*, Volume II. C. D. Broad (ed.). Cambridge University Press.
- McTaggart, John McTaggart Ellis (1934). *Philosophical Studies*. S. V. Keeling (ed.). St. Augustine’s Press.
- Mellor, D. H. (1981). *Real Time*. Cambridge University Press.
- Mellor, D. H. (1998). *Real Time II*. Routledge.
- Moore, G. E. (1903). “The Refutation of Idealism”. *Mind* 12(48), 433–453.
- Mundle, C. W. K. (1954). “How Specious is the ‘Specious Present’?”. *Mind* 63(249), 26–48.
- Oaklander, Nathan L. (1992). “Zeilicovici on Temporal Becoming”. *Philosophia* 21(3-4), 329–334, reprinted in Oaklander and Smith (1994).

- Oaklander, Nathan L. (2007). “Reminiscences of Bergmann’s Last Student”.
Laird Addis, Greg Jesson, and Erwin Tegtmeier (eds.) *Ontology and Analysis: Essays and Recollections about Gustav Bergmann*. Ontos verlag, 287–297.
- Oaklander, Nathan L. (2015). “Temporal Phenomena, Ontology and the R-theory”. *Metaphysica* 16(2), 253–269.
- Oaklander, Nathan L., and Smith, Quentin (eds.) (1994). *The New Theory of Time*. Yale University Press.
- Prior, Arthur N. (1957). *Time and Modality*. Clarendon Press.
- Prior, Arthur N. (1959). “Thank Goodness That’s Over”. *Philosophy* 34(128), 12–17.
- Prior, Arthur N. (1967). *Past, Present and Future*. Clarendon Press.
- Quine, W. V. O. (1953). “Mr. Strawson on Logical Theory”. *Mind* 62(248), 433–451.
- Quine, W. V. O. (1960). *Word and Object*. MIT Press.
- Reichenbach, Hans (1947). *Elements of Symbolic Logic*. Dover Publications.
- Reyburn, Hugh A. (1913). “Idealism and the Reality of Time”. *Mind* 22(88), 493–508.
- Russell, Bertrand (1903). *The Principles of Mathematics*. Routledge.
- Sider, Theodore (2001). *Four-dimensionalism: An Ontology of Persistence and Time*. Clarendon Press.
- Smart, J. J. C. (1949). “The River of Time”. *Mind* 58(232), 483–494.
- Smart, J. J. C. (1955). “Spatialising Time”. *Mind*, 64(254), 239–241.
- Smart, J. J. C. (1962). “Tensed statements: A comment”. *Philosophical Quarterly* 12(48), 264–265.
- Strawson, Peter Frederick (1952). *Introduction to Logical Theory*. Routledge.

- Weaver, H. E. (1909). “*The Unreality of Time*. J. ELLIS MCTAGGART. Mind, No. 68, pp. 457- 474.”. *Philosophical Review* 18(4), 466–467.
- Welby, V. (1909). “Mr. McTaggart on the “Unreality of Time””. *Mind* 18(70), 326–328.
- Williams, Donald C. (1951). “The Myth of Passage”. *Journal of Philosophy* 48(15), 457–472.

(山口大学時間学研究所)